



Bobine

Tokyo Neko-jin Blueberry

ポピン

幾分かの時間が過ぎて、彼が白い扉を滑らかに開く。

この病室に来るまでの廊下にまで漏れていた泣き声。 彼は、白い廊下の真ん中にひかれた黄緑色の線の上で、長い時間その声を聴き、

病室に入ろう、いや……

と逡巡しては、佇み続け、今、ようやく扉を開いた。

清潔な個室の隅にある漂白されたベッドの上に、彼女はいる。

窓は半分だけ開いていて、ここは7階だから風が強くて、白のカーテンをなびかせる。

水玉模様の薄い毛布の上から、さっき白い扉にしたように、ポンポンと彼女にノックする。彼女に、来たよ、と声を掛ける。返事はおろか、毛布も被ったまま。彼はレスポンスは求めない。

彼は入口横にあった木製の丸椅子をベッドの横まで運んでそこに座り、肩に掛けていた鞆を、ベッドの足元を跨ぐように設置してある長方形のテーブルに置いた。

座ると同時に、彼女が毛布の端から顔を出した。いや、正確には彼女の顔は両手で覆われている。その左手には、小指が無い。

十分に解っているはずなのに、彼は彼女の姿を見る度にそれを確認する。彼女に悟られないよう、さり気無く。

まるで一昨日までの事が白昼夢であったかのように、彼女の小指が有るべき所に戻ってはいないだろうかと、彼は毎度毎度同じように淡い夢を見る。

彼女の左手の、かつて小指のあった中手指節関節には白い包帯がぐるぐると巻き付けられている。

「まだ、痛い？」

彼は一応そう訊くが、恐らくもう痛みはないだろうと確信していた。だから、返事も要らなかった。

「この病院広くってさあ、何度来ても迷うんだけど。さっきもマップ通りにこの病棟のこの病室に向かってたはずなのに、知らない間に中庭みたいな所に出ちゃったよ。知ってる？ なんかすごく豪華な雰囲気。図書館の横になるのかな？ つーか図書館がある事自体に驚きなんだけど、ね。具合、どう？ 指はもう痛まないの？ そういえば今日CTスキャン撮ったんだってね。俺一度も体験した事無いけど、近未来な感じが結構好きだわあ。知ってる？ あの機材の開発費用ってさ、ほとんどビートルズのレコード売上が供給元なんだよ？ これなかなか良い雑学だろ？ まあ、昨晚ウィキったから知ってるだけなんだけどね……、うん」

彼の言葉が果てるのと同時に、涙に音が無くなって、少し静まった。顔を覆う9本の指達の向こうで、彼女が深呼吸しているのが分かった。彼女からも、両手の向こうで彼が微笑んでいるのが感じ取れた。

彼は尚も話を続けた。内容の無い話。

彼は彼女に相槌など望んではいなくて、ただ聞こえていれば、いや、彼女に話し掛けている自分の存在を頭の中の片隅で認識してもらえていれば、それ良かった。だから、突然彼の言葉を遮るように彼女が言葉を発した事に、驚いた。

「小指が無いなんて、極道の人ようだわ」

彼は啞然として反応に遅れたが、彼女がニカッと笑う顔を見て我に返り、だっ……、とどもりながらも、

「第一声がそれかよ」

と笑って返した。彼女が両手を下し、微笑んだ。

「指、見せて」

「指が無いのよ？」

「指が無い所を見せて」

「いいよ」

彼は左手で差し出された彼女の手を支え、左手で包帯に触れた。

無き小指をさする彼の手が、彼女の薬指に移行する。

「確かに小指は無くなったけど、結婚指輪は嵌められるね」

「結婚なんて、出来ると思う？」

「なんで出来ないと思うの？」

彼が微笑む。

彼の手が、彼女の中指に触れる。

「この指はお箸を扱う時に、地味に良い仕事するんだよ。知ってた？」

彼女は何も言わず、彼に触れられる自分の指を見つめて動かない。

次の指へ。

「人差し指の用途は数えられないくらいあるねえ。まあ、具体例は全然思い浮かばないけれど」

彼女の頬がゆるむ。

彼が彼女の親指を握る。彼女の親指の先が赤くなる。

「メール、返してよ」

「ごめん」

彼の手が、彼女の小指があった包帯のもとへ回帰。

「ナイフはさあ、君の小指を切り落とせても、君と誰かを結ぶ赤い糸までは切る事は出来ないんだよね。けど、結んでおくところを失ったんだから、君は残った指で赤い糸をしっかり握っておかないとね」

「かっこ悪いね」

「いや、俺は素敵だと思うよ、小指の不在を補おうとする君は」

「違う」

「違うくない。残りの4本の指だったり、もう片方の手だったり、笑顔だったり、とっても素敵だ」

「違う、そうじゃなくて」

「えっ」

「かっこ悪いのは君だよ。クサ過ぎる」

彼は真顔で「ああ……」と声を漏らして、それを見て彼女が笑った。

顔を赤くした彼は、頭の中であれこれ言い訳を考えるが言葉にならなくて、ちょっと煙草吸ってくるわ、と言って自分の鞆から煙草と100円ライターを取出し、病室を出て行った。

口の開いた彼の鞆から、ポピンがこぼれた。